

Ⅱサムエル 16 章「真実と偽り」

私たちは様々な人のことばを聞きますが、それらが真実か偽りかを見極めることが難しい場合があります。そのような中で私たちが惑わされないで、主に喜ばれ、間違わずにいるにはどうしたら良いでしょうか。今日の聖書箇所からそのようなことを考えたいと思います。

1. ツィバの来訪（：1～4）

ダビデの一行はオリーブ山の頂から、おそらく北東に向かって、ヨルダン川の方へと少し下って行ったのでしょう。そこに、メフィボシェテのしもべツィバがダビデに会いに来ました。彼は一くびきのろばに多くの食料を積んで持って来ました。急いでエルサレムを脱出したダビデの一行にはありがたいことだったでしょう。

そのツィバはメフィボシェテのしもべです。ダビデはサウルの所有であった物をみな、メフィボシェテに与え、それらを管理していたツィバをメフィボシェテに仕えさせていたのです。それでダビデはツィバに「あなたの主人の息子はどこにいるのか」と問います。あなたの主人とはサウルのことで、その息子とは実際には孫ですけれども、メフィボシェテのことです。するとツィバは答えます。3 節。このツィバのことばは嘘であって、メフィボシェテはそのようなことを考えていないことが後で分かります。おそらくツィバはダビデから褒美を得たいと思っていたのでしょう。

ダビデは「メフィボシェテのものはみな、あなたのものだ」と言います。多くの食料を届けてくれたことに感謝していたからか、ダビデはここで愚かな判断を下してしまいます。ツィバのことばを簡単に信じてしまいます。メフィボシェテの言い分を聞かずに即決してしまいます。事実を確認しないまま、一方の話だけを聞いて、簡単に判断してしまう過ちを犯すことがないようにと教えられます。

ただ、サウル家の一族の中にはいまだに、ダビデの王位に対して不満を抱える者たちがいたようです。それが次に記されている出来事に現れています。それゆえにダビデは、たった一人生き残っているサウルの孫のメフィボシェテの動向には気を遣っていたということでしょう。

2. シムイの呪い（：5～14）

ダビデの一行はさらに北東に向かい、バフリムまで来ました。バフリムはベニヤミン族の町で、サウル家の一族も住んでいたようです。その一人、シムイという人がダビデたちの一行に近づき、「盛んに呪いのことばを吐き」、石を投げつけました。

7～8 節。これはひどいことばです。アブサロムの謀反にあったダビデの窮状に付け入るような態度です。「主」がそうしたと言っていますが、シムイの勝手な見解です。「主がサウルの家すべての血に報いたのだ」とダビデの責任であるかのように責めています。ダビデはサウル家の人々の死に全く関わってはいません。呪いのことばとして極端に誇張しています。

このように呪っているシムイに対してアビシャイが怒って、「あの首をはねさせてください」とダビデに求めます。ツェルヤの子ヨアブとアビシャイはダビデ軍の長ですが、いつも血気盛んなところがあります。

それに対してダビデは言います。10～11 節。ここではダビデは非常に謙遜な態度です。ダビデの心にあったのは、自分の態度がアブサロムの謀反を引き起こした一つの原因だという自覚、それに対するさばきを含めて、すべて神、主のご支配の中にあるという主への信頼です。ダビデは、アブサロムの謀反についても、シムイの呪いについても、そこに主のどのようなみこころがあるのか、まだ分かっていないので、そのことを見極めたいという思いを持っていたのでしょう。自分の罪に対するさばきであり報いなのだろうか、それともアブサロムやシムイの罪であって、主がやがて彼らをさばき、報いられるのか、主のなさることを待ち、見届けたいという思いなのでしょう。

そして、サウルの家へのダビデの態度について言えば、その内容は全く正しくなくて、自分に非はないと分かっていますので、主がふさわしく報いてくださると委ねています。12 節。こう言って、ダビデはシムイが自分を呪うのをそのままにして、なおも進んで行き、ある所まで行って、一息つきました。

私たちにとって、誰かからの非難をこのように謙遜に受け止めるのは難しいことです。すぐに反論し、怒り、大声で自己弁護します。ダビデの謙遜はどこから出ていたのでしょうか。それは、主の御前にあるという自覚によると思います。「主が彼に命じられたのだから」、「主は私の心をご覧になるだろう」と言っています。そのように言うことができたのは、ダビデが普段から主との交わりを豊かに持っていたからではないでしょうか。詩篇に歌われているような主への信頼や祈りが彼の心にあったからでしょう。

3. フシャイの忠誠（：15～19）

さて、アブサロムは南のヘブロンで謀反を起こし、従う者たちとエルサレムに向かいました。そして、ダビデたちが退去した後のエルサレムに入りました。ダビデの助言者であったアヒトフェルも一緒でした。

ダビデから協力を依頼されたフシャイはアブサロムのところに行き、「王様万歳。王様万歳」と言って、取り入ろうとします。それに対してアブサロムは、フシャイがダビデの友であることを知っていますから、皮肉を込めて言います。17 節。

フシャイはアブサロムに疑われることも想定していたでしょう。それでもダビデに背くことを公言することはできません。それでこう言います。18～19 節。

フシャイは自分が誰に仕えるのかをはっきりと語っていませんし、ダビデに背くとは言っていません。このように知恵を用いて、あえて曖昧にして語り、アブサロム陣営に入り込みます。

4. アヒトフェルの助言（：20～23）

エルサレムに入ったアブサロムは、これからどうすべきかをアヒトフェルに助言を求めます。そこでアヒトフェルが進言した助言の一つは、アブサロムがダビデの側女たちのところに入るということでした。

21 節。王の側女のところに入ることは、次の王になると主張することでした。そして、アブサロムに従う者たちは、もう後戻りできないことを知って、戦う意志を固くすることになるでしょう。しかし、このことは姦淫の罪ですから、主の前には喜ばれません。謀反の成功のためには良くて、罪をそそのかす助言でした。

それでも、アブサロムは助言の通りに行いました。このことはかつてナタンがダビデの罪を指摘し、主のさばきを告げた預言の成就でした。神のご支配の中にあり、ダビデに対するさばきでもありました。

以上のように、この章にはいろいろな人のことばが記されています。それらのことばが真実か偽りか、敵か味方か見抜くことが難しいものです。その中でダビデも、好意を受けて、性急に判断して、過ちを犯すことがありました。その一方でダビデは、自らの責任も自覚しながら、主のさばきであることも含めて、主のご支配の中にあると主に委ね、主への信頼に立っていました。

この章から、真実か偽りか見抜くための助けとなることをいくつか教えられます。一つは、一人の意見だけではなく、他者の意見を聞くことでしょう。特に誰かを不利にするようなことばに対しては、その相手のことばも聞いて判断する必要があります。

もう一つは、これが大事ですが、主のご支配の中にあることを信頼して、主が正しくさばきをなさることに委ねていることです。主への信頼に基づいているなら、性急に行動して間違えることから守られます。

さらに、みことばに照らして、主に喜ばれることであるかどうかを判断することが大事です。いくら人々を喜ばせたり、人々の士気を上げたりすることになるとしても、主のみこころに反することであるなら、それは避けなければなりません。

そして、最終的には、真実と偽りとを見抜く知恵を、主からいただけるように、落ち着いて祈り求めることが大事です。主からの知恵を祈り求めましょう。